

第9回フォーラム報告集

FORUM

フォーラム
'90s



1999・3

最終号

フォーラム90s

通巻96号(最終号)

【編集前記】

フォーラム90sの第九回フォーラム&総会が、昨年十二月五〜六日、東京大学農学部で開かれた。五日の年次総会にて、フォーラム90sの活動と組織を九九年三月をもって正式に閉じることを決定した。したがって、本誌「フォーラム90s」は通巻九六号が最終号である。

盛況裡に幕を閉じた全体集会和各分科会の報告を前段に、フォーラム90s活動の重要な一翼を担った「講

座の全紹介とその総括」、つづいて寄稿原稿「フォーラム90sとは何であつたのか」を後段に紹介した。

九年間にわたるフォーラム90sの活動とその成果・評価はどのように位置づけられるのか。本誌が寄稿者三十数名による様々な角度からの発言に対し、全会員が自己の判断を投影させつつ、新しい明日へつながる一助になれば幸いである。

一九九九年三月一日

フォーラム90s運営委員会

目次

第九回フォーラム●

最後の二二月フォーラム 成功裡に幕を閉じる 4

第九回フォーラム●全体集会・講演

開かれた地域主義へ向かつて——グローバルゼーションに抗して 本山美彦 5

第九回フォーラム●分科会

〔第1分科会〕新ガイドライン安保と沖繩・天皇制 9

〔第2分科会〕アジア経済危機と政治再編 11

〔第3分科会〕世紀末大不況とマルクス経済学 13

〔第4分科会〕社会主義像の探究 16

〔第5分科会〕啓蒙の世紀と現代・自由主義の再検討 19

〔第6分科会〕一九六八年パリ五月革命三〇周年 22

〔第7分科会〕障害者教育・普通学校で学ぶ意味 24

第九回フォーラム●活動報告

フォーラム90s 総会への活動報告(九八年二月五日) 運営委員長 白川真澄 27

特集●水と住民自治 御嵩フォーラム

第I部 住民投票と民主主義、産廃問題 小西和子／長谷川直美／松尾もみぢ／岡本隆子 33

第II部 水の循環・公共事業・中山間地域の活性化・流域圏 大野和興／宮沢杉郎 41

木曾川流域圏共同体構想——産廃処分場問題から見えてきた上下流提携の道 糸土 広 44

⑥(夢幻)としての労働者共和国／石塚正英・岩田昌征

⑦アジア・マンズリーレヴェュー／山川曉夫

⑧生命・欲望・環境 科学論の新たな冒険／池田清彦

第七期(一九九六・五〜一九九七・三)

①マルクス経済学の方法／降旗節雄

②「グラムシ・リーダー」を読む／片桐薫

③労働者民主主義の検証 社会主義再論／栗木安延

④アジア・マンズリーレヴェュー／山川曉夫

⑤民主主義のための哲学入門／田崎英明

⑦ルカーチの存在論「ソフィアの世界」から解く／石塚省二

⑧インターネットに何ができるか／粉川哲夫

第八期(一九九七・五〜一九九八・三)

①アジアフォークス・ツデー／山川曉夫

②ヘーゲル事始／長谷川宏

③美術史から読む精神分析／田崎英明

⑤第三世界フェミニズム／岡真理

⑥ルカーチの存在論 欲望・他者・自然／石塚省二

⑦生物医学と現代社会の危機／川本隆史・小松美彦 市野川谷孝

⑧一九二〇年代の光芒 天皇制と社会運動／伊藤晃

(講座委員長) 降旗節雄 事務局(江村信晴・中野達彦・吉沢明)

情 況

【第三十卷第九期】
【三月十七日発売】

【特集】
70年一総括への前梯

高橋順一／姜尚中／ガイ・ヤスコ／小
松美彦／櫻本陽一／三上治／橋本
努／高杉公望／上条三郎／榎原均

【書籍】

「情況」四月号別冊
現代社会学理論の最新線
二〇世紀社会学の知を問う
西原和久／櫻井洋／坂井充／宇都宮
京子／早川洋行／前田征三／森田敬賢
／今野晃／畠田園江／友枝敏雄／菅
野博史／中馬祥子／数土直紀／栗原
孝／鈴木健之／石塚省二／中島祝
定価三〇〇円(本体二〇〇円)

随園戯編・中野清編
孔子が話さなかったこと
ケニー・ス・ファン・ステークホーヤ
中 国 怪 奇 譚
定価 本体一五〇円十税

情況編集部編
ナシヨナリズムを読む
定価 本体二六〇円十税

山本耕一著
権力
社会的威力・イデオロギイ・人間生態系
定価 本体三四〇円十税

情況編集部編
「近刊」**沖繩を読む**
定価 本体二六〇円十税

【定価】
一三三〇円(税込)
東京都千代田区神田保町一ツカトビル402
電話 03-3233-0031
ファクシムル 03-3233-0036
振替 00180-8-49197
全国1000円引
送料別
送料別
送料別

情況出版

フォーラム90sとは何であったのか

表から・裏から見たフォーラム90s

..... フォーラム90sの一〇年間

塩川喜信

一 単発のフォーラムではなく恒常的組織として「フォーラム」を作るから協力してくれという話を聞いたのは、八九年の暮れ、P P 21の山形集會のお手伝いをした関係で出たP A R Cの忘年會の流れの酒の席である。即座に「協力する」と答えたのが大失敗で、「協力」どころか事務局長になれという依頼を受けてしまった。はっきり断らないで「考えておきます」と答えたのが第二の失敗で、翌九〇年一月、東中野での準備會に少し遅れて出たときには、出席者のかなりの人たちが、初対面の方を含めて、私の事務局長を既定事

実としている雰囲気であった。まもなく、これはいいだも氏流の「自分が言ったことは相手が了承したこと」という「作法」だということが分かったが、そのときは非常に戸惑い、また困惑した。なぜなら、「社会主義理論フォーラム」以降、単発のフォーラムやグラムシ・シンボ等には参加し、発言をしたことはあるが、事務局など主催者側になつたことは一度もなく、またフォーラム結成当時、発起人や事務局メンバーに少なからず名を連ねていた旧「クライシス」の人脈とも無縁だったからである。しかし結果として、この半ばは「詐欺」とも言える「既成事実」を受け入れたおかげで、ほぼ一〇年、足掛けにすれば一一年、フォーラム90sとつきあうことになつてしまった。

二 しかし今、この一〇年間を想い出して、

後悔の念は全くない。むしろ、自分にとって、非常に貴重な時を過ごさせてもらったという感が深い。一つには、フォーラムの目的が納得できるものだったからである。フォーラムは東欧・ソ連の崩壊により「社会主義」の政治・経済と思想が未来社会への選択肢としての地位を失い、他方資本主義が「新古典派」「新自由主義」の旺盛にもかかわらず、腐朽と衰退を深めているという状況認識の下、資本主義を超える新しい社会システムを構想しなければならぬという問題意識を共有する人々によって作られた。これは私自身の問題意識でもあったし、生涯の課題でもあった。

二つには、フォーラム、特に初期の「作風」が、党派的利害を前面に出したり、意見の違いを必要以上に拡大したり、派閥やヒエラル

キーを作ったりしないようにとの、フォーラム結成当初からの組織論的目標を、多くの会員が理解し、そのような組織作りへと意識的に動いていたことである。勿論、例外がなかったわけではないが。

三つには、フォーラムに参加したことによって、学会・大学アカデミーや限られた分野での社会活動では望めない多くの学者や運動家との出会いの機会が与えられ、研究会、シンポジウム、地方フォーラム、年末の全体フォーラムと分科会など数多くの場で、大きな知的刺激を受け、また各地の運動から学んだ例は枚挙に暇がない。

四つは、人脈上のつながりがほとんどなかったにもかかわらず、会員、世話人、事務局のメンバーが、暖かく私を受け入れ、支えて下さったことである。九二年から三年連続して入院・手術という、私個人にとっても大変な時期だったし、九〇年は創立準備期のフォーラム90sとトロツキー没後五〇年の事務局長を兼任したため、私の超多忙のあおりで、妻が過労で急性脾臓炎を起し、インシュリン依存型糖尿病という日本では余り多くない一生の病を発症してしまつた。しかし、この個人的にも困難な時期を、こうした人々に支えられて、何とか乗り切ることができた。

三 やや個人的な感懐を述べてしまつたが、フォーラムの活動自体はどうだつたのか。私の評価は、九八年二月の総会で、白川運営委員長が行つた総括報告と基本的に一致するが、今後への参考となることを願いつつ、いくつかの点を指摘したい。特に、フォーラムの解散を決定した九八年一月総会で、「資本主義の危機が深刻化している現在こそ、フォーラム的な活動が必要とされている。フォーラムは課題を達成したとはいえない」という、私自身も納得せざるを得ない批判を念頭に置いて、「成果」というよりはフォーラムが「達成できなかったこと」を述べたい。

第一は研究会活動についてである。フォーラムの研究会活動は、当然の事ながら、個人の知的興味を充足するためや、公式アカデミーでの「業績」のために行われるものではない。結果的にこうした面が生まれることはむしろ望ましいが、それはあくまで副産物であつて、主目的は、現存資本主義体制に対するオルタナティブを構想することにある。そこからの当然の帰結は、政治・経済・社会の各分野は勿論、環境・資源問題、マイノリティや社会的弱者の問題、そして民衆の生活の視点などを総合した構想にならざるを得ない。

九四年に研究委員会「新しい社会システム

の構想」を立ちあげて以来、私は研究委員会の責任者として、このことを強く意識してきたが、成功とはいいたいと思つている。オルタナティブについての検討は、世界的に見てもまだ十分な成果を上げていないので、無い物ねだりや高望みをしては仕様がなないが、各分野での創造的な研究や、実証分析をふまえた提言は少なからず生まれている。しかし、学問研究の専門領域がますます細分化されており、運動もシングルイッシュュー化している状況の中で、各分野の最高の成果をインテグレートする事なしに、オルタナティブの構想を産み出すことはできない。五年間の研究会には、数多くの研究者が報告を引き受けて下さり、個々の報告としては素晴らしいものも少なくなかった。しかし、ある分野で貴重な報告をしてくれた方が、自分の専門以外の分野の研究会に出席することは稀であつた。会員以外の方に報告をお願いした場合には、これはやむを得ないことだが、フォーラムの会員や研究委員会の会員（研究委発足時に、研究会の主旨を配布、研究委の会員を募つたところ、四〇人前後の申し込みがあつた）の場合でも、研究者の継続参加はスタッフ以外にはほとんどなく、様々な分野の研究者が専門外の成果や問題点を学んで、オルタナティブに主体

的に参加するという形を作ることができなかった。私自身の力量不足を痛感しているが、同時に、特に三〇代から五〇代にかけての研究者が、大学行政の雑務に追われ、また自身自身の研究課題で多忙な生活を送っていて、オルタ構想などという「業績」にもならず、「成果」の見通しもはつきりしない事に時間を割く余裕が無いという状況が、大きな制約要因だと思われる。解決するのは難しい問題であるが、おそらくこれからも同じような課題が、残るであろう。

四 上記と関連する第二の問題は、「参加意識」というか「参加意欲」というか、一人一人の会員、世話人、事務局スタッフなどの「意識」「意欲」の波及組織の構造の「揺らぎ」の問題である。フォーラムの雑誌「フォーラム90s」の九一年五月号に私はフォーラム90sとは何かフォーラムへ組織論」に関する共同討論のために」という文章を書いた。その中でロシア革命と東大闘争の例を引きつつ闘争や運動の高揚期には、多くの人々が、自発的に運動に参加し、活発な発言や自己表現を行って運動の活性化をもたらすが、こうした状況は長続きせず、やがて人々が日常に回帰した後に、官僚化や運動の沈滞が訪れると述べた。そして、「フォーラム90sの特質

の一つだと私が思うのは、運動の高揚期に作られた組織ではないにもかかわらず、高揚期のような構成員の意識的参加を前提に、組織運営をしようとしていることです」と書いた。これは、実状というよりは、私の理想、あるいは願望の表明だった。この課題は達成できただろうか。残念ながら、フォーラム90sは、発足当初の数年はまあまあであったが、年を経るにつれ、参加意識の低下、世話人会まかせ・事務局まかせの傾向を深めていったと、私自身の自省を含めて認めざるを得ない。特に問題なのは、比較的早いうちから、研究者と活動家との分業関係がはつきりしたことである。研究会やシンポジウムでの「報告者」や雑誌への「執筆者」として、多くの研究者がフォーラムの活動に参加した。また、編集委員会にも若手研究者が協力して下さった。このことには本当に感謝している。しかし、事務局の実務的活動を支えたのは、この一〇年間、ほぼ「活動家」であったといつてよい。こうした「分業」のスタイルはこのままでよいのか。東大闘争に「助手共闘」の一員として参加し、著作や講義・講演は進歩的、だが研究室運営や大学行政では……という事例をいやというほど見てきた立場からすると、「フォーラムよ、お前もか」といいたくなる

状況は否定しがたい。

フォーラムが果たせなかった課題を二つばかり挙げた。このほかにも言及すべき課題は多いが、既に紙数を超過している。最後に若干の付け足しを許していただきたい。

五 現代社会の支配的システムである資本主義は、人類史上「最も柔軟で、外的条件の変化に応じた適応力」自己変革能力のあるシステム」だったといえよう。だがその能力に陰りが見えて既に久しい。資本主義に代わる社会システムの構想「ビジョン」を想像・創造し、そのような社会へのプロセスを、世界各地で既に生まれている理論や運動の成果を生かしつつ、発見しなければならぬ。フォーラム90sは幕を閉じる。活力を失った組織が、組織の自己保存のために無理に生き延びる道を探すことは、その組織の腐敗ばかりでなく、社会的にも負の遺産しか残さないという事例を私たちは数多く見てきた。だが、フォーラムが幕を閉じて、課題が無くなったわけではない。私自身は、こうした課題に取り組みつつ、仲間がいれば一緒に、いなければ一人でも、若くはない私の残りの人生を生きていきたいと思う。

最後に、フォーラムは多くの貴重な「出会い」を私に与えてくれたが、同時に、悲しい

「別れ」もあった。九〇年一二月の発会フォーラムの準備委員一七名のうち、平田清明、廣松渉の両氏は既にこの世にない。初期の事務局で、目立たないけれど献身的に活動して下さった水野光雄さん、研究会やシンポジウムでフォーラムを支えて下さった大熊直人さん、渡辺多恵子さん、その他ここではお名前を挙げ切れぬ今はなき方々にフォーラムは支えられてきた。幽冥境を異にしたこれらの方々が、フォーラムの解散をどのように見ておられるのか、知るすべもない。私自身は、「初心忘るべからず」をモットーに、フォーラムがかげた課題の解決に一步でも近づくよう、微力を尽くすことで、今はなき人々に許しを請うしかない。

フォーラム90s解散の後、フォーラムの後継を目指す動きがあるが、私は今の所こうした動きに参加しようとは思っていない。フォーラムの「遺産」の継承は、少し時間がかかっても、フォーラムを中心で担ってきた世代よりはもっと若い世代にゆだねたいと思っている。こうした組織作りの「手順」を知った老世代が先走りすることは、若い世代の登場の障害になりかねないと考えているからである。そうはいっても、そのうち、もぞもぞと「蠢動」しないと切り切れるわけでもないが、

.....

フォーラム型運動の 二一世紀へ

加藤哲郎

二一世紀を目前にひかえて、フォーラムは花盛りである。九〇年代に飛躍的に広がったインターネットの世界ではとりわけ顕著で、例えば定番サーチエンジン「ヤフー」日本版で「フォーラム」とインプットすると、九〇〇を越える「フォーラム」サイトが出てくる。このたび幕を閉じようとする「フォーラム90s」と入力しても六三のサイトが出てきて、自治体や青年会議所のホームページとともに、私の「加藤哲郎の研究室」や小倉利丸さん、栗原幸夫さんの個人ホームページなどが、たちどころに提示される。

一九九〇年にフォーラム90sが立ち上がった時は、そうではなかった。財界や市民のフォーラムがいくつもあったが、まだ新鮮な響きを持っていた。私自身は八九年東欧革命を「テレビ時代のフォーラム型革命」と命名していたから抵抗はなかったが、私と一緒に創立準備のよびかけ人会議で記念講演した故廣松渉さんや、「クライシス」再刊を期待して

いた人たちはどうであったか？ 残念ながら、もう廣松さんの「総括」は聞けない。

フォーラム90sは、ホブズボームのいう「短い二〇世紀」の終焉、現存社会主義の自滅による冷戦崩壊・国際共産主義運動解体・社会主義思想衰退への、日本的応答の一つであった。新旧の別なくゲッター化されつつあった左翼とラディカルズの緊急避難といえなくもない。だがそうした消極的性恪づけでは不十分だろう。事実、結成時にはそれなりの熱気があった。それは、後ろ向き「自己批判」や「総括」によってではなく、二一世紀の方へ向かって、エコロジー、ジェンダー、エスニシティなどのイシューも組み込んだ新しい社会運動・思想運動の模索という面を持っていた。だから組織のあり方は、常にフォーラム内での重要な論点だった。時には過去の党派性がぶつかりあうこともあった。女性会員は少なかった。「赤と緑の連合」をよびかけても「緑」に相手にされないこともあった。だがともかく九年間存続した。そして90sが終わり、二一世紀に入ろうとしている。

フォーラムの隆盛は、別に日本だけの現象ではない。御本家Yahooで、Forumを検索すると、四七のカテゴリにまたがる四六四三のサイトが表示される。Political Partyだと三

カテゴリー一〇八二であるから、「政党」よりもはるかに広く世界中に広がった、ある種の組織であり、運動スタイルであり、公共圏であることがわかる。

私自身がフォーラム90sに託したのは、いうまでもなく八九年東欧革命の主人公となった、民衆の闘争舞台、諸思想潮流の交流・連帯の場としてのフォーラムであった。それは、古代ローマの「公共の広場」という語源に忠実な、インフォーマルな運動と思想の交差する場であり、問題の解決のあり方を探り、交流し、インスピレーションを得る場であった。その御本家東欧のフォーラムは、八九年一〇〇年の高揚期の後、いくつかの政党に分化したり、市民運動に変身・埋没したり、いつのまにやら解散したりと、姿がみえなくなった。旧東独では、かつての「ベルリンの壁」近くの一等地の雑居ビルが「Haus der Demokratie」と称して、一〇〇年にわたり、さまざまな市民運動・少数派運動の基地の役割を果たしてきた。しかし首都機能移転の再開発ラッシュのなかで、「社会主義」以前の私的所有権が復活され、明け渡しを迫られている (Berliner Zeitung, 4. Nov. 1998)。

だから、日本のフォーラム90sが、ともかくも一九九〇年代を生き抜いたことは、それ

自体としておおいに意義があることである。問題は、それが「フォーラム」討論の「広場」としての内実をどれだけ獲得し蓄積し得たか、そこから何が生まれ二世紀に受け継がれていくかにある。そのさいフォーラムに集った人々がある一つの方向に向かうことは、ありえないし、期待もされない。むしろ無数の新たなフォーラムが生まれ、しかし九年間の絆がネットワークとして保たれる状態が、望ましい姿であろう。事実そうした試みが、さまざまに始まっているようだ。旧東独「民主主義の家」も、そのような場であった。

このことは、一つの神話の終焉を意味する。二〇世紀初頭にロシアで生まれた「全知全能の唯一前衛党」神話である。それは「戦争と革命の時代」に一世を風靡した。日本でも新旧左翼が「前衛」を競い合った。ほぼ一九六〇年代を境に世界的にも日本でも退潮に向かうが、そこに捧げられた膨大な自己犠牲・献身のヒストリーがあり、それに裏切られ流された多くの血といのちのストリーがあつた。そうした運動の歴史的帰結から生まれたフォーラムが、「唯一」にも「前衛」にも「政党」にも、ある種の拒否反応を示すのは当然であった。フランス共産党は、九八年一月に過去のすべての除名・政治的処分を無

効とする決定を行い、かつての除名者・離党者に復党をよびかけたが、「フォーラムの一年」をくぐった後では、それで「前衛党」に戻ろうとする人は多くはなかった。

日本のフォーラム90sは、「前衛」神話が消えても「観客」には甘んじられない諸個人が、その知的道德的リーダーシップを競い合う舞台となった。ただしそれは、同質的政治を前提する「諸党派の野合」でも「統一戦線」でもなく、組織も個人も、システム変換の構想もシングル・イシューも、地球市民派も土着派も、コミュニティアンもリバタリアンも含む、重層的競合であった。誰でも学ぶことができ、活用し協力できる、ささやかな公共圏であった。にもかかわらず、ベルリン「民主主義の家」がそうであったように、舞台の設営とコミュニケーションの結節点には、自己表出・自己実現を「禁欲」し、実務に活動エネルギーの相当部分を割いた事務局の人々がいた。つまり、「前衛」の資質と志向をもちながら敢えて「後衛」の仕事に徹する男女の存在が、フォーラム型運動には不可欠であった。それは、インターネットを舞台にしたバーチャル・フォーラムでも同じである。だから私は最後に、そのような人々から拍手を送り、御苦勞様と言いたい。

フォークラム90sの 大きなインパクト

栗木安延

フォークラム90sは僕にとつてもかなり大きなウエイトを持った存在であった。その一つの側面は、フォークラム90sで知遇を得た人々の関係で一定の仕事をしたことであろう。

まず、いいだも氏らが企画した「近代日本社会運動人物事典」である。一九九七年一月内外アソシエーツ(株)から刊行された全六巻の膨大なものである。労働者運動・無産政党関連の一、三〇〇余もの多数の人々の足跡を記録し活字にできたという喜びは今なお心底から沸き上がるものがある。個人的にも指導を受けた今野良蔵という重要人物らを落としたという自責の念に駆られる点もあるが、この分野では最高の業績であることは間違いない。

たとえば類似の青木書店刊の「日本社会運動人物辞典」一九七九年と比較すれば、明白である。青木本では対象に取り上げた人物の数で一、五〇〇人に対して、われわれの本は

一五、〇〇〇人、ページ数で青木本六六四頁に対して、四、二三八頁である。しかも質的な水準においても、僕が担当した労働者・無産政党だけでも、「特高月報」その年報に当たる「社会運動の状況」他の資料文献をはじめ本格的に駆使するなどの点で一歩シフトしたことは否めない事実である(もし、皆さんの居住地域の公共図書館や所属の大学などでまだ購入していない場合には、是非備えるようにして欲しいものです)。

次の仕事は松田健二氏の社会評論社から一九九七年刊行した「アメリカ自動車産業の労使関係」である。レギュラシオン学派のフォークラム90sの積極面を評価して日本に紹介したのはフォークラム90sに参加したのがフォークラム90sのメンバーである山田鋭夫氏らには大きな刺激を受けた。たまたま若い頃からフォークラム90sの研究調査を継続してきた結果をまとめて本にする契機になったことはいうまでもない。

ところでフォークラム90sを振り返ってみると、僕にしてみればかなり積極的に参加した。その要因はフォークラム90sの討論のテーマが時代の要求に正面から応えるものであり、それぞれ別の専門領域からの報告が多かったからであろう。次々と生起する世紀末的な諸事件

や課題に関しては、従来の細分化された個別の学問では総合的な把握はできないからである。学際的という点と反発する向きもあるだろうが、これまでの専門を越えて多面的な考察を必要とするのだから、今のところ二義的に行っても学際的と言っしかない。

フォークラム90sの学際的な性格を継承して生まれたのが社会理論学会である。例えば社会理論学会で新たに企画しているのが少年犯罪に関する研究だが、それには刑法はじめ心理、教育、社会学などの専門を異にする研究者グループを集めて持続的な研究調査が必要である。社会理論学会は、これまでポランテニア論、発展途上国ネパールなどの都会活動を中心とする活動が活発に行われてきたが、今後はさらに社会福祉、社会運動、宗教と科学、情報理論、情報公開・プライバシー、協同所有などの分野にも広げて行くつもりである。関心のある皆さんのご参加を期待している。フォークラム90sの解散を待たずに社会理論学会は一九九七年一月立ち上げたが、それは学会という異質な組織的な性格によるものであったからであろう。

一九九〇年代も終わりを迎えて、フォークラム90sもその組織にピリオドを打つことになった。その後身として二つの組織が早速名乗

りを上げた。

その一つがアソシエ21(仮称)である。一九九八年二月一日付伊藤誠氏、橋本盛作氏、古賀逸氏の三名の呼びかけ「新たな世紀へ批判的知性の協働を！」を受け取った。早速賛意を表する返事を送った。一月三十一日の事実上の発足の会には期末試験採点の期日と重なり参加できなかったが、数百人に及ぶ賛同者を得たという情報を聞いた。もう一つはオルタ・フォーラムQという組織である。一九九九年二月四日の連絡によれば、代表丹野清秋氏、事務局長中野達彦氏、事務局次長田上孝一氏、編集長村岡到氏らの名前が並んでいる。

何れもフォーラム90sの継承であり、ほとんど主張内容において質的な差異はないと見てよいだろう。如何なる点でそれぞれの個性を發揮するのか、今後の課題であろう。できれば両組織の協同による討論の場であるフォーラムを形成してもらいたいものである。

統一は、それぞれの個性を尊重しながら提携することにある。

二一〇年前のフランス大革命と、その頃から半世紀に渡って展開したイギリス産業革命は一九世紀のヨーロッパおよび全世界を規定する大事件であった。一八七一年パリ・コミ

ューン、一八七三年以降の大不況とその過程で形成されたビッグビジネス体制は二〇世紀を規定する重大な要因となった。二一世紀を規定する要因は既に二〇世紀末に顔を出している。それは資本主義経済体制の制度疲労である。長期不況や貧富の絶望的な格差拡大などは、その現象形態である。もう一つはマイクロ・エレクトロニクスME革命による社会変動であろうが、それは資本主義体制のもとでは体制疲労の促進剤になるのか、カンフル注射になるのか。まさに、激動の振幅は拡大の一途を辿るであろう。(一九九九・一・三二)

世の中つて、不思議である

君島悦子

ありきたりの言い方で恐縮するが、世の中つて不思議である。それまで「運動」というものにほとんど縁のなかった私が、なぜフォーラム90sの事務局に勤めることになったのか。ふりかえると、さまざまな思いが去来する。

私をフォーラム90sに入れたのは、社会評論社の松田さんである。そのころ私はフォーラム90sがやっていた石塚省二さんの講座に

関わっていて、仕事から時間がわりと自由になった。これが運の尽き。いいだもさんが面接をしてくれた。

私がフォーラム90sの事務局を務めたのは一九九三年六月から九七年二月まで、足掛け五年である。「月刊フォーラム」の終刊にともなうての解雇だった。しかし、よくまあ四年半も務まったものだ、と、われながら感心している。最低限の仕事は一応こなしつつもりだが、とても真面目な事務局員とは言えなかった。そういう意味では、歴代の事務局員の中でも随一だと思う。しかし、そんな私がいちばん長く務まったのだ。どうして？

昼過ぎにやっと現れて、たそがれるころからおもむろに仕事にかかる。時には深夜に及ぶ。ほとんど夜行性動物だ。勤めて初めての年の暮れ、会費の請求を年内にやっつてしまおうと、大晦日の夜中に東中野の事務所ですつせと請求書書きをしていたら、山谷掃りの天野さんが偶然立ち寄って、私もビックリしたが、あちらは相当驚いたらしい。だって、妙齢の女性が、深夜、それも大晦日に、こんなことをやっているんだから、変なやつだと思われてもしかたがない。

あまりにビックリして、天野さんは新年早々(もう年が明けていた)私にお酒と餃子